

言語獲得の観点から探る終助詞の機能

木戸 康人・村杉 恵子

『アカデミア』文学・語学編

第92号 抜刷 2012年6月

南山大学

名古屋市昭和区山里町18

ACADEMIA Literature and Language (92)

June 2012 Offprint

NANZAN UNIVERSITY

18 Yamazato-cho, Showa-ku, Nagoya, Japan

言語獲得の観点から探る終助詞の機能

木戸 康人・村杉 恵子

Abstract

In this paper, we examine the mechanism of Japanese sentence-ending markers such as *na*, *ne*, *yo*, and *yone* in adult and child grammar. We first argue that Japanese-speaking children produce the sentence-ending markers at a very early stage of language acquisition on the basis of the analysis of the previous literature (Okubo 1967, Okada and Grinstead 2003) and the corpus analysis of Sumihare (Noji 1973–1977). We argue that the sentence-ending markers *na* and *ne* are produced at around the age of 1; 5, while *yo* and *yone* are produced at around the age of 1; 9. Although there are some cases where *na* used by young children contains the meaning of request and intention, the sentence-ending markers are basically used in the same way as adults'.

Then, we conduct a binomial test as part of the quantitative research in order to verify the hypothesis that some sentence-ending markers (*na* and *ne*) are acquired earlier than the others (*yo* and *yone*), and report that the sentence-ending markers such as *na* and *ne* are acquired earlier than *yo* and *yone* (binomial test, $p < .001$).

Consequently, we propose that the sentence-ending markers, *na*, *ne*, *yo* and *yone* are acquired in this order at a very early stage of language acquisition. The conclusion would provide a piece of evidence for Murasugi's (2011, 2012a, b) hypothesis that the elements in the speech act phrases (above CP layers) found even at the Root Infinitive Stage would trigger the bootstrapping of the tense elements in sentences in the grammar acquisition (Pragmatic Bootstrapping Hypothesis).

1. はじめに

モダリティをあらわす終助詞は、日本語では(1a)ならびに(1b)に示すように文末にあらわれる。日本語の終助詞には、「よ」のような「話し手指向」のものと「ね」のような「聞き手指向」のものが存在することがよく知られている。

- (1) a. 太郎は、蜂の子を食べるよ
 b. 太郎は、蜂の子を食べるね
 c. 太郎は、蜂の子を食べるよね
 d. * 太郎は、蜂の子を食べるねよ

(1a)に示す終助詞「よ」は、聞き手の知らない情報を、話し手が聞き手に対して伝達し、(1b)に示す終助詞「ね」は、話し手の発話する命題内容を、話し手が聞き手に確認する機能を果たしている。これらの二つのタイプの終助詞は、(1c)に示すように共起することができるが、(1d)の対比に見るように、「ねよ」での語順は、日本語では許されない。つまり、終助詞「よ」と「ね」が共起する場合、(1c)に示す「よね」の語順でのみ、文末にあらわれうる。

終助詞の機能に関しては、主に語用論的・意味論的観点から多くの研究(伊豆原 2003, 遠藤 2007; 2008; 2010, 金水 1993, 宮崎 2002 等)がなされているが、近年では、生成文法理論の枠組みからもその統語的性質についての研究(遠藤 2007; 2008; 2010, 井上 2009, Saito 2009; 2012 等)が進められつつある。そうした大人の文法研究とは独立に、幼児の終助詞の獲得についても、縦断的観察に基づいた研究やコーパス分析研究が報告されている(大久保 1967, Okada and Grinstead 2003 等)。

本稿では、終助詞の「な」や「ね」、「よ」、ならびに「よね」に関する大

人の文法を概観し、その上で、幼児がいつどのようにそれらを獲得するのかについて考察する。日本語の幼児言語コーパス(CHILDES)を基に、質的量的研究を行なうことにより、本稿では、終助詞が極めて早い段階で獲得されていることを実証的に示す。

2. 終助詞に関する大人の文法

言語には、主節のみであらわれる現象がいくつかある。例えば、主語・目的語の右方移動は、(2a)や(2c)に示すように主節では許されるが、(2b)や(2d)に示すように埋め込み節では許されない。

- (2) a. 蜂の子を食べたよ、[太郎が]
 b. * 次郎は蜂の子を食べたよ、[太郎が] と思っている
 c. 太郎が食べたよ、[蜂の子を]
 d. * 次郎は太郎が食べたよ、[蜂の子を] と思っている

こういった現象は「主節現象」と称されるが、日本語の終助詞の生起もまた「主節現象」と呼ばれる現象のひとつである。(3)に示すように、終助詞「な」や「ね」、「よ」などの終助詞は、主節にのみあらわれる。

- (3) a. [[太郎がみかんを食べた] ね/な/よ/よね]
 b. * [次郎は[太郎がみかんを食べたとね/な/よ/よね] 思っている]
 c. * [次郎は[太郎がみかんを食べたとね/な/よ/よね] 思っている]

終助詞「ね」、「な」、「よ」、及び「よね」は、(3a)に示すように主節の文末に生起することは可能であるが、(3b)に見るように、埋め込み節の文末には生起できない。また、直接引用でない限り(3c)も不可能である。

本節では、終助詞「ね」、「な」、「よ」及び「よね」の意味と機能、ならびに統語的特性について概観する。

2.1. 終助詞「ね」と「な」の意味と機能

終助詞「ね」は、(4)に示すように、話し手が聞き手に話し手の意図する命題内容を確認する機能をもつ。

- (4) A: あなたが田中さんですね。
B: はい、そうです。 (宮崎 2002)

(4)における終助詞「ね」は、「あなたが田中さんである」という命題内容を確認する機能を果たしている。

宮崎(2002)は終助詞「ね」には、「な」という文体的変種があると述べている。例えば、(5a)と(5b)は、談話上、同義である。

- (5) a. よく頑張ったな
b. よく頑張ったね

(5a)の文末の「な」の機能は、(4)で見た「ね」の機能と同様に、話し手が聞き手の行動に対して「よく頑張った」という命題内容を聞き手に確認するものである。したがって、(5a)の文末の終助詞「な」を、(5b)に示すように終助詞「ね」で代用したとしても、いずれの終助詞も「よく頑張った」という命題内容を聞き手に確認するという点において同様の機能をもつ。

さらに、終助詞「な」には、対話のみならず、独話においてもあらわれることが遠藤(2007; 2008; 2010)や小野・中川(1997)によって報告されている。例えば、遠藤(2007; 2008; 2010)は終助詞「な」の独話での機能は、証拠性を示すことにあると説明している。ここでの証拠性とは、話

し手がある事象を何らかの証拠を基に判断することを意味する。具体例として、(6)を見てみよう。

- (6) 今日は外が寒そうだな

(6)では、話者が外で雪が降っているのを屋内から見ている状況で発話されているが、このとき話者は「雪」という証拠を基に「外が寒そうだ」と判断している。文末の「な」は話者が「外は寒い」と判断したことをあらかず機能を果たしている。

このように、終助詞「ね」と「な」には二つの語用論的特性があるようである。第一に、終助詞「ね」と「な」が対話で用いられるときには、それらは話し手が聞き手に命題内容を確認する機能をもつ。第二に、終助詞「な」が独話で使用される場合には一定の証拠性を示す。

2.2. 終助詞「よ」の語用論的機能

話し手の意図する命題を聞き手に伝えるときに終助詞「よ」が用いられることはよく知られている。金水(1993)は、「よ」の機能には、教示用法と注意用法があると指摘している。

教示用法とは、(7a)に示すように、聞き手が知らない、もしくは気づいていない情報を聞き手に告知知らせる用法のことである。一方、注意用法とは、(7b)に示すように、話し手が既知の情報を聞き手が未知である場合、話し手が聞き手の注意を喚起して情報を伝達する用法である。

- (7) a. 危ないよ
b. 今日は休みだよ

(7a)では、少年が道路に飛び出すという状況において、話し手が「道路に

飛び出すと危ない」という命題内容を、危険に気づいていない少年（聞き手）に告知している。この場合、終助詞「よ」は、聞き手が気づいていない情報を伝達しており、その意味において教示用法の機能をあらわしているといえる。一方、(7b)では、仕事が休みの日に、聞き手が仕事へ行く支度をする様子を話し手が目の当たりにするという状況において、聞き手にとっては「今日は休みだ」という命題内容が未知であると話し手が判断し、話し手がその命題内容を聞き手に伝えることで聞き手の注意を喚起している。つまり、終助詞「よ」を文の端に付けることにより、聞き手がもたない情報を話し手が知らせている。この意味で、(7b)で示した「よ」は注意用法の機能を示しているといえる。

このように、終助詞「よ」は、一般的に、話し手が聞き手に情報を伝達する機能をもつが、より厳密には二種類の用法—聞き手が知らない情報を告知する教示用法と話し手が聞き手の注意を喚起する注意用法—があるようである。

2.3. 共起する終助詞：「よね」の機能

終助詞「ね」と「な」、「よ」は、いずれも話し手と聞き手の関係をつなぐものであるが、これら終助詞は、必ずしもひとつしか文末にあらわれなくてはならないというものでもない。終助詞は二つ連続してあらわれることができる。例えば、「よね」もしくは「よな」のような表現が可能であり、それらは「よ」や「ね」が単独であられる場合とは異なる意味をもつ。

伊豆原（2003）は、「よね」とは、終助詞の「よ」と「ね」がそれぞれもつ機能を合成した意味機能を果たすとし、その意味機能をさらに三種類に分類している。

第一に、「よね」は、話し手の認識の受け入れを求め、聞き手と認識を共有しようとする意味機能をもつ。(8)の例を見てみよう。

- (8) A: 眠くなんないの？ 夜になって。
B: いや、仕事に眠くなるんですよね。（伊豆原 2003: 7）

伊豆原（2003）は「よ」の機能は、話し手が、彼（女）の認識を聞き手に共感して受け入れてもらうことを求めるものであり、「ね」の機能は話し手の発話を和らげるものであると説明し、(8)にあらわされるBの文末の「よね」は、「よ」と「ね」のもつ機能を合成したものであるようであると述べている。すなわち、(8)は、「仕事に眠くなる」という認識をもたないA（聞き手）に対して、B（話し手）がその認識をAに伝えている。ここでの「よね」の機能は、和らいだ表現で「仕事に眠くなる」という話し手の認識を聞き手に共感して受け入れてもらおうとする機能を果たしている。

第二に、「よね」は、(9)に示すように、話し手の認識が聞き手の認識でもあるかを聞き手に確認することにより、聞き手を話し手の認識領域に取り込む機能をもつ。

- (9) A: 真夜中に一人で外を歩くのは危ないよね？
B: そうだね。

(9)では、A（話し手）のもつ「真夜中に一人で外を歩くのは危ない」という認識がB（聞き手）の認識でもあるかを聞き手に確認している。この場合、「よ」もしくは「ね」単独ではこのような意味機能の読みは不可能であり、終助詞を「よね」というように二つ共起させることによって、合成的な読みが可能になる。つまり、(9)の文末の「よね」は話し手の認識を聞き手に確認し聞き手を話し手の認識領域に取り込もうとする機能をもつといえる。

第三に、「よね」は、(10)に見るように、話し手が、自分の認識が聞き手の認識と一致することを確認することにより、話し手自身の認識を確実なものにしようとする機能をもつ。

(10) A: 明日の天気予報って雨だったよね?

B: そうだよ。

(10) では、A (話し手) は話し手の「明日の天気予報は雨だった」という認識が B (聞き手) の認識でもあるかどうかを確認している。終助詞「よね」は、話し手が、自身の認識を聞き手に確認することによって、その認識の確かさを確実にする機能を示す。

以上、終助詞「ね」、「な」、「よ」ならびに「よね」の大人の機能と特徴について概観した。終助詞「ね」は、話し手の命題内容を聞き手に確認し、終助詞「な」は対話で使用される場合には終助詞「ね」と同様の機能を果たし、独話で使用される場合には証拠性を示す。終助詞「よ」の機能は話し手もつ情報を聞き手に伝達することである。そしてそれらは共起が許される場合があり、「よね」のように二つ並んだ終助詞は、それぞれの終助詞を合成した意味と機能をもつようである。

2.4. 終助詞「な」、「ね」、「よ」、及び「よね」の統語的特性

では、日本語の終助詞はいかなる統語的特性をもつのだろうか。昨今、日本語の終助詞については、遠藤 (2007; 2008; 2010) や Saito (2009; 2012)、村杉 (2012)、Murasugi (2011; 2012a, b) 等によって、統語的特性に関して検討がなされつつある。それらに基づくと、終助詞には、少なくとも以下の三つの特徴があるようである。

第一に、日本語の終助詞は、(11) に示すように、文末に二つまでは生起が可能だが、三つ以上が生起することは難しい¹⁾。

- (11) a. 太郎はみかんを食べるよ/ね
 b. 太郎はみかんを食べるよな/よね
 c. * 太郎はみかんを食べるよねな

(11a) や (11b) に示すように、一つあるいは二つの終助詞は文末に生起することが可能だが、(11c) の例に示すように三つ以上の終助詞が共起することはできない。

第二に、終助詞は、(12) に示すように、一定の語順でのみあらわれうる²⁾。

- (12) a. 神戸のパンはおいしいよね/よな
 b. * 神戸のパンはおいしいねよ/なよ
 c. 神戸のパンはおいしい*なね/*ねな(/な(ポーズ)ね/ね(ポーズ)な)

2) 遠藤 (2007; 2008; 2010) は、終助詞が、複数あらわれる場合の順序は、Cinque (1999) の提案する普遍的なムードの階層構造により決定されるとしている。普遍的なムードの階層構造とは、通言語学的に、ボイスやアスペクト、ムードなどの機能範疇の形態素のあらわれる順序に普遍性があることから提案された機能範疇の階層構造のことである。そのうち、遠藤 (2007; 2008; 2010) は、(iii) で見るような終助詞が持つムードを基に、(ii) に示した TP よりも上部にあらわれる Cinque (1999) の提案するムードの階層構造に日本語の終助詞を当てはめた。

(ii) [MoodP_{speechact} [MoodP_{evaluative} [MoodP_{evidential} [MoodP_{epistemic} [TP] わ] な] よ] ね]

(iii) *太郎が来るでしょうわ/わでしょう

(ii) の終助詞の順序について、遠藤は終助詞「わ」が (iii) に示すように「~でしょう」のような認識のムードをあらわす要素と相補分布を成すことから、終助詞「わ」は MoodP_{epistemic} の主要部を占め、終助詞「な」については、(6) のように独話において証拠性を示すことから、MoodP_{evidential} の主要部を占め、終助詞「よ」は、(7) に示したように話し手が命題内容を評価して聞き手に情報を伝達するため、MoodP_{evaluative} の主要部を占め、終助詞「ね」は (4) で見たように、話し手が聞き手に命題内容を確認するという発話行為の機能をあらわすため、MoodP_{speechact} の主要部を占めると説明している。以上のことから、遠藤は終助詞「わよね」の順序が Cinque (1999) の提案するムードの階層構造から説明できると提案している。

1) 本論では、(i) に示すような終助詞「わ」と「よ」と「ね」の連続は例外であると考える。

(i) 明日学校に行くわよね

(i) の場合、終助詞「わ」と「よ」と「ね」が連続して三つ生起している。

(12a) に示すように、終助詞「よね」や「よな」は可能であるが、(12b) で示すように終助詞「ねよ」や「なよ」といった語順は許されない。(ただし、(12c) に示すように終助詞「な」と「ね」の二つの終助詞の間にポーズをおくと、終助詞「な、ね」もしくは、終助詞「ね、な」は容認される。)

第三に、日本語の終助詞は、文のタイプを決定するものではないが、(13) に示すように、文のタイプにより共起できるものとできないものがあるという特徴がある。

- (13) a. 太郎は蜂の子を食べるのか [ね/な]
 b. [[ForceP [FinP [TP 太郎は蜂の子を食べる] の] か] [ね/な]]
 c. [早く蜂の子を食べる] [よ/*ね]

疑問文の場合、終助詞「ね」と「な」は、(13a, b) に示すように疑問をあらわす終助詞「か」と共起することができる。Saito (2009) の分析を仮定すると、終助詞「ね」と「な」が、統語構造上、疑問をあらわす終助詞「か」よりも高い位置に生成されていることになる。このことは、日本語の終助詞が CP 層の一部ではないことを強く示唆する。

文のタイプが命令をあらわす場合、(13c) に見るように、共起できる終助詞は、「よ」であり、終助詞「ね」は命令をあらわす文の末尾にあらわれることができない。「よ」が終助詞であるならば、「ね」は「よ」を含む文全体を選択する助詞であることになる³⁾。これはすなわち、大人の構造において、

3) Haraguchi (2012) は 2.4. で挙げた三つの制約は、終助詞が何を選択するかという c-selection によって説明できると提案している。Haraguchi (2012) は、終助詞「わ」は確信に関わる終助詞であり、命題を選択し、終助詞「よ」は主張に関わる終助詞であり、命題もしくは、疑問、確信を選択し、終助詞「ね」は確認あるいは同意に関わる終助詞であり、命題または疑問、確信、断定を選択すると提案している。

(v) 太郎が来る -わ-よ-ね (Haraguchi 2012)

(v) に見るような文末の終助詞「わよね」は、終助詞「わ」が「太郎が来る」という命題を選択し、終助詞「よ」が「太郎が来るわ」という確信をあらわす文を選択し、終助

終助詞「ね」が構造上、最も高い位置にあることを意味する。

このように、日本語の終助詞には少なくとも三つの制約がある。第一に、日本語の終助詞は三つ以上が生起することは難しい。第二に、日本語の終助詞には語順に一定の制限がある。第三に、日本語の終助詞は文のタイプにより共起できるものが限られるというものである⁴⁾。

ここでは詳細に立ち入らないが、Murasugi (2011; 2012a, b) は、文の共起関係ならびに、多言語との比較研究から、終助詞に一定の階層があることを指摘し、幼児が談話に関する構造を、文構造よりも早く獲得するとする仮説を提案している、これについては次節にて簡単に紹介する。

3. 終助詞に関する子どもの文法

では、日本語を母語とする幼児は、2 節で論じたような終助詞の意味機能や統語的特徴をいつどのように獲得するのであろうか。

詞「ね」が「太郎が来るわよ」という断定をあらわす文を選択することで、派生されると説明している。

4) Saito (2009) は、終助詞「の」、「か」及び「と」は、CP 内にあらわれると提案している。Saito (2009) は、(iva) に示すようなイタリア語や英語の左方周辺部の階層構造が (ivb) に示すように、日本語の右方周辺部に同様の特徴をもってあらわれると提案している。

(iv) a. [ForceP [TopP* [FocP [TopP* [FinP [TP]]]]]] (Rizzi 1997)

b. [ReportP [ForceP [TopP* [FocP [TopP* [FinP [TP]]]]]] (Saito 2009)

Rizzi (1997) は、(iva) に示すように、Force では、IP/TP の命題内容の発話内力が指定され、Fin では、文の定形/非定形に関する素性が指定されると述べている。そのうえ、Force と Fin の間に主題や焦点を認可する Top や Foc の投射が随意的にあらわれると提案している。遠藤 (2007; 2008; 2010) は、このカートグラフィーの分析を日本語にも当てはめ、終助詞「ね」や「な」などもまた CP 内に存在するとしている。一方、Saito (2009) は、(ivb) において、日本語の ReportP の主要部には直接引用や言い換えに関わる「と」が、ForceP の主要部には疑問文の場合、疑問をあらわす「か」が、FinP の主要部には命題に関わる「の」がそれぞれあらわれると提案している。Saito (2009) の提案を採用すると、「ね」や「な」は (13a, b) のように、ForceP よりも上部にあらわれることになる。本稿では、この仮説を仮定する。

終助詞が早期に獲得されることを指摘する研究は少なくない（大久保 1967, Okada and Grinstead 2003 等）。本節では、幼児の終助詞に関する研究内容を概観した上で、CHILDES (MacWhinney 2000) のデータベースの中からスミハレの発話が記録されたコーパスデータを用いて、終助詞の獲得に関して質的量的分析を行なう。

3.1. 幼児の終助詞の獲得に関する先行研究

本小節では、Okada and Grinstead (2003) と大久保 (1967) による終助詞の獲得に関する研究を概観する。

3.1.1. 右方周辺部にあらわれる文末助詞の獲得

Okada and Grinstead (2003) は、日本語の文末にあらわれる終助詞が CP 領域内にあるとする大人の文法を仮定し、その上で、幼児が終助詞を含む CP 領域をいつ獲得するのかについて、コーパス分析を行なっている。彼らは、CHILDES のコーパスを用い、特に Aki コーパス (Miyata 1992) の 1 歳 4 ヶ月 7 日から 3 歳までの発話の中から、節の周辺部分にあらわれる CP に関係した要素である終助詞「ね」、「よ」、「の」、「か」と命令の「て」、疑問詞「なに」、話題をあらわす「は」、理由をあらわす「から」、ならびに関係節の要素を抽出し、それらの初出時期について検討している。Okada and Grinstead (2003) の得た結果は以下のようなものである。

表 1 CP 領域に関する要素の初出

construction		age of onset
<i>-ne</i>	tag question	1;11.29
<i>-yo</i>	emphatic	2;0.12
<i>-no</i> <i>-te</i>	Q marker imperative	2;2.0
<i>Nani</i>	<i>wh</i> word	2;3.4
<i>-wa</i>	topic marker	2;3.18
<i>-ka</i>	Q marker	2;4.29
<i>-kara</i>	subordination	2;8.17
	relative clause	2;11.0

(Okada and Grinstead 2003: 216)

表 1 に示されているように、1 歳の終わりから 2 歳の初めには文末要素の産出が観察されているようである。「ね」は、1 歳 11 ヶ月 29 日に、「よ」は 2 歳 0 ヶ月 12 日に、他の文末にあらわれる要素は 2 歳 2 ヶ月 0 日以降に観察されている。

更に、表 1 に示された項目のそれぞれの具体的な発話として、Okada and Grinstead (2003) は、(14) から (22) に示す例を挙げている。

- (14) 母：お客さん いない よ。
Aki：ない ね。 (1;11.29)
- (15) 観察者：ちっちゃい？
Aki：おっきい よ。 (2;0.12)
- (16) Aki：いいの？ (2;2.09)
- (17) Aki：おいてて。 (2;2.09)
- (18) Aki：こっち なに？ (2;3.4)

- (19) Aki: きょうりゅうさん は? (2;3.18)
 (20) Aki: て かこう か? (2;4.29)
 (21) (Aki が玩具の電池入れを開けるように母に頼んで)
 Aki: できないから。 (2;8.17)
 (22) Aki: きノウ かった やつ これ。 (2;11.0)

(14) は、終助詞「ね」、(15) は、終助詞「よ」、(16) は、終助詞「の」、(17) は命令形の活用語尾「て」、(18) は疑問詞「なに」、(19) は話題を標示する助詞「は」、(20) は疑問をあらわす終助詞「か」、(21) は理由をあらわす「から」、(22) は関係節について、それぞれの初出を示す例である。終助詞「ね」は CP に関係する要素の中で最も早くあらわれている。更に、終助詞「よ」は「ね」より遅れて 2 歳 0 ヶ月 12 日に観察されている。終助詞「ね」や「よ」以外の CP に関係する要素は 2 歳 2 ヶ月以降にあらわれている。このように、CP に関係するそれぞれの要素の初出時期には差があると Okada and Grinstead (2003) は分析している。

Okada and Grinstead (2003) は、CP 領域にあらわれるべき要素が発現するのは 2 歳頃からであり、文法知識と語用論的知識の両方を統合できるようになる 1 歳 11 ヶ月以前には CP 領域に関わる要素が観察されないとしている。幼児にとって、文法知識と談話における語用論的知識を結びつけることは難しく、文法と談話文法を結びつけることができるようになるまでは、幼児の発話には CP 領域は観察されないことを示唆する。さらに、Okada and Grinstead (2003) によれば、CP に関する要素をすべて同時期に獲得できないのは、文法的知識と多様な談話での語用論的知識を結びつけることが難しいためであると説明している。

本稿では、終助詞が CP 領域内にあるとは仮定しない。むしろ、本稿では Saito (2009; 2012) ならびに Murasugi (2011; 2012a, b) の分析を基に、日本語の終助詞が CP 領域よりもさらに上の談話に関する構造内にあると仮

定していることから、Okada and Grinstead (2003) の分析をそのまま採用することはできない。

しかしながら、Okada and Grinstead (2003) の行なったコーパス分析は、本稿に関連する重要な観察を含む。それは、Aki の発話した終助詞 (Okada and Grinstead (2003) によれば、それぞれの右方周辺部にあらわれる要素) の初出時期には差がある点である。終助詞「ね」は 1 歳 11 ヶ月 29 日に初出がみとめられるが、終助詞「よ」は 2 歳 0 ヶ月 12 日に初出が観察されている。つまり、「ね」は「よ」より早く獲得されているようである。

更に、終助詞「ね」や「よ」は、終助詞「の」が初出される 2 歳 2 ヶ月 9 日より約 2 ヶ月も早くあらわれる。さらに、幼児は終助詞「ね」や「よ」を CP に関係する疑問詞「なに」や話題をあらわす「は」などの要素よりも早い時期に産出している。このように、終助詞「ね」や「よ」は他の CP に関係する要素よりも早く獲得されるようなのである。

これらの言語獲得に関する事実は、本稿の導き出す結論を支持するものであり、本稿にとって極めて重要な記述である。

3.1.2. 助詞と動詞の活用の獲得研究

日本語を母語とする幼児が、終助詞を早期に発話することを示す研究として、大久保 (1967) を挙げるができる。

大久保 (1967) は、日本語を母語とする幼児 Y (Y 児) という女兒を被験者として、縦断的観察に基づき、発話された語の初出の年月と 6 歳までの使用数を記録している。この大久保 (1967: 93) の資料には、幼児の言語獲得に関して重要な記述が残されている。それは、終助詞が極めて早い段階で観察されるという点である。

Y 児の場合、終助詞、格助詞の主要な助詞は、1 歳の終わりまでに発話されるが、大久保 (1967: 101) は、助詞の中で一番早くあらわれるのは終助詞であり、格助詞はその後の時期にあらわれると観察している。

具体的な例を見てみよう。大久保（1967：84）の観察において、Y児が終助詞を発話する時期は極めて早い。終助詞「よ」や「ね」及び「な」は、(23)に示すように、1歳6ヶ月から発話され始める。

- (23) a. イヤヨ。 (1;6)
 b. ソウネ。 (1;7)
 c. チョウダイナ。 (1;8)
 d. コレハ イイナ。 (2;1) (大久保 1967)

(23a)は、終助詞「よ」が1歳6ヶ月に、(23b)は「ね」が1歳7ヶ月に、(23c)は、対話における終助詞「な」が1歳8ヶ月に、(23d)は独話における終助詞「な」が2歳1ヶ月に初出したことをそれぞれ示している⁵⁾。(23)のように、それぞれの終助詞の発現時期には明確な差があると大久保（1967）によって分析されている。

ところが、終助詞「よ」や「ね」に比べると格助詞は、かなり遅く発話される。大久保（1967）の観察によれば、終助詞は格助詞である主格の「が」や属格の「の」、対格の「を」及び斜格の「へ」や「に」よりも早く獲得されるようなのである。

Y児の格助詞の発現時期と実際の発話を見てみよう。(24)は主格の例である。

- (24) a. ココガ イタイ。 (1;9)
 b. オヤマガ デキタ。 (1;10) (大久保 1967)

(24a)の発話は、Y児が1歳9ヶ月に初めて主格の「が」を発話した例であ

5) (23)から(27)の発話がどのような場面で発話されたのかについての文脈は大久保（1967）によって記述されていなかった。

る。(24a)は「ここが」のように、場所を示す「ここ」という代名詞に主格の「が」を付与している。(24b)は、(24a)と同様に、Y児が主格をあらわす「が」を1歳10ヶ月に発話した例である。(24b)は「おやまが」のように、「お山」という名詞に「が」を付けているようである。

更に属格の「の」は、主格よりも遅くあらわれる。

- (25) a. ヤチヨノ シャシンハ? (1;11)
 b. パパ ガッコウノ センセイ。 (2;0)
 c. タンポポノ オベベ。 (2;1)
 d. ヨソイキノ オベベ。 (2;6) (大久保 1967)

(25a)は、Y児が所有をあらわす属格の「の」を1歳11ヶ月に観察された発話例であり、(25b)は、所属をあらわす属格の「の」を2歳0ヶ月に、(25c)と(25d)は名詞句の状態や形状をあらわす属格の「の」を2歳1ヶ月と2歳6ヶ月に発話した例として記述されている。

対格の「を」についても、Y児は(26)のように発話したとされている。

- (26) a. オメメ ヲ モッテキテ、 オメメ。 (1;8)
 b. キューピーチャンガ オカタヲ タタキマショウッテ。 (1;9)
 (大久保 1967)

(26a, b)は、Y児が1歳8ヶ月ならびに1歳9ヶ月に発話した対格の「を」の例である。(26a)の発話では、「おめめを」というように、「目」をあらわす「おめめ」に対格の「を」を付与している。(26b)では、「おかたを」と示されているように、「肩」を意味する「おかた」に「を」が付いている。

(27)は、大久保（1967）が、Y児が発話した斜格として例示するものである。

- (27) a. コッチへ ブーブー フイテネ。 (1;9)
 b. オメデトウ。ココへ イラッシャイマセ。(2;1)
 c. ココニ ノッタノヨ。 (1;9)
 d. アッタネ オウマニ ノンノヨ。 (1;10) (大久保 1967)

大久保 (1967) によると, (27a) は, Y 児が 1 歳 9 ヶ月に初めて着点をあらわす斜格の「へ」を発話した例である⁶⁾。(27b) は, (27a) と同様に, 着点をあらわす斜格の「へ」を 2 歳 1 ヶ月に発話した例である。(27a) と (27b) では, 「こっちへ」や「ここへ」というように, 着点をあらわす代名詞「こっち」や「ここ」に斜格の「へ」を付けている。

さらに, (27c) の発話は, 1 歳 9 ヶ月に場所をあらわす斜格の「に」を初出した例である。(27d) は, 1 歳 10 ヶ月に (27c) と同様に, 場所をあらわす斜格「に」を発話した例として記述されている⁷⁾。(27c) と (27d) の発話では, 「ここに」や「おうまに」のように, 場所をあらわす(代)名詞「ここ」や「おうま」に斜格の「に」を付与している。

このように, 幼児 Y は, 談話文法に関する助詞である終助詞「な」と「ね」及び「よ」は 1 歳 8 ヶ月までに発話し, 文文法に関する助詞である主格「が」や属格「の」, 対格「を」ならびに斜格「へ」や「に」は 1 歳 9 ヶ月よりも後に発話している。

果たして, 日本語を母語とする幼児は, Okada and Grinstead (2003) と大久保 (1967) が指摘するように終助詞を早期に獲得するのだろうか。次節では, 幼児の発話において, 終助詞「な」や「ね」, 「よ」及び「よね」が大人の文法における終助詞とどの点で共通し, どの点で異なるのかに関して質的研究と量的研究を行なう⁸⁾。

6) 「ぶーぶー」は「笛」のことであると大久保 (1967) によって記録されている。

7) 「あったね」は「明日ね」の意であると大久保 (1967) によって観察されている。

8) (2) と (3) に示したように, (via) のような主語の右方移動や (vib) のような終助詞は,

3.2. 方法

言語獲得の実証法については, さまざまな方法があるが, 昨今の傾向としては, 幼児には「基本的なものは生得的にすべて備わっている」として幼児の誤用研究についての理論的分析を否定するものも少なくない。また, 一定の要素について, コーパスにあらわれるその要素の数を数えて (統計処理により) 幼児の文法知識の実在性を示す研究も少なくない。しかし, 一定の要素 (と要素) がコーパスにどの程度あらわれるかを数えるだけでは, 幼児の文法を知る上で十分とはいえない。記述することで目に見える音と, 目には見えない話し手の意図や意味を把握することではじめて, それらをつなぐ統語的な特徴の大枠が見えてくる。

話し手が幼児の場合, その意図を正確に把握するのは, 実際は容易ではない。話し手 (幼児) がどのような意図や意味で発話しているのかを知るためには, その発話の状況を詳細に知ることが不可欠であり, それを知るためにはコーパスの作成者 (観察者) がどの程度そのテキストを書き記したかによるところが大きい。

その意味において, 野地 (1973-1977) は優れた縦断的研究であるといえよう。野地氏は自身の子ども (スミハレ) の自然発話を観察し, その記述を本としてまとめているが, そこには, 実に詳細な発話時のコンテクストに関する記述が残されている。

主節のみで観察された。

(vi) a. エッ ユータ ヨ アーチャン ガ。(→母) (1;11)

b. トーチャン チンチンブー ダッコ イッタ ね。(→母) (1;11)

(via) の発話の文脈として野地 (1973-1977: 384) は, 「母におんぶして, 赤ちゃん (アーチャン) が, 「エッ」と言うと, すぐにこのように言う。」と記述している。(via) では, 主語である「アーちゃんが」の右方移動が示されている。他方, (vib) の発話が観察された状況について野地 (1973-1977: 366) は, 「午前 9:30 過ぎ, 父が外出すると, すぐに, 母に向かって電車 (チンチンブー) に乗って, 学校 (ダッコ) へ行ったと言う。」と記録している。スミハレの発話では, (vib) のように, 終助詞は主節の文末にのみあらわれている。この現象は (3a) で示したように, 大人の文法の終助詞と同じ位置にあらわれている。

本稿では、CHILDES コーパスを用いつつ、それぞれの発話された状況について発話資料（野地 1973-1977）をひとつひとつ確認することにより、スマハレの1歳5ヶ月から3歳0ヶ月までの発話を対象として、終助詞のあらわれ方と意味機能と特性に関して質的分析を行なう。さらに、同コーパス（CHILDES）を使用して、二項検定による量的統計分析を行なうことにより、質的研究の結果から得られた仮説が支持されるかどうかを検証する。

3.3. 終助詞に関する質的研究：コーパス分析

本小節では、日本語を母語とする幼児スマハレの発話コーパスデータから終助詞「な」、「ね」、「よ」及び「よね」の発話を中心に抽出し、それらが大人の文法の機能とどのように共通するのか、あるいは異なるのかについて質的分析を行なう。

3.3.1. 幼児の終助詞「な」と「ね」の語用論的機能

終助詞は、Okada and Grinstead (2003) や大久保 (1967) 等の先行研究で指摘されている通り、幼児発話において、それぞれが単独に、そして驚くほど早期にあらわれる。スマハレの発話においても、終助詞は1歳代であらわれ、多くの終助詞の中で最も早く発話の観察されるのは、終助詞「な」と「ね」である。

例えば、スマハレは、(28) と (30) に示すように、終助詞「な」を1歳5ヶ月23日に、終助詞「ね」を1歳5ヶ月25日に初めて発話している⁹⁾。以下、具体的な終助詞の発話例を概観しよう¹⁰⁾。

9) 例文に掲載しているアラビア数字は野地 (1973-1977) の観察記録に則ったものである。

10) 発話の最後に示された(父→)や(→父)、(→己)は、誰が話し手で誰が聞き手であるのかを示している。例えば、(父→)は、父が話し手でスマハレが聞き手であることを示し、(→父)は、スマハレが話し手で父が聞き手であることを示している。さらに、(→己)は、スマハレが話し手で聞き手が存在せず、独話であることをあらわしている。

(28) は、終助詞「な」を初出した際の発話である。

- (28) 1. ココオ ゴオーツ シュー ポッポガ ハシッテ クルカラ ネ。
2. ミテテ グラン。
3. ココオ トーリマス カラ ネ。(父→)
4. ……………な。(→父) (1;5.23)

野地 (1973-1977: 158) は、(28) の発話状況について「父と散歩に出て、鉄橋のあるところまで行く。そこで、1・2・3の文のように言っていると、4のように言う。「……………」は左右に手を振りながら、なにか話しかけてくるのだが、うまく聞きとれない。「シュー ポッポガ ココオ トーッテ クルノヨ ネ。」というようなことを言いたいのである。」と記述している¹¹⁾。(28) の4の発話は「汽車がここを通る」ことを父に確認している。ここでの発話末の「な」は、(観察者の聞きとれなかった)「……………」の命題内容を、聞き手に確認する機能を果たしている。

大人の文法において対話で使用される終助詞「な」は、(5a) に示したように、話し手が聞き手に命題内容を確認する機能をもつことを思い出されたい。(例文再録)

- (5) a. よく頑張ったな

(5a) は、終助詞「な」が「よく頑張った」という命題内容を聞き手に確認する機能をあらわしている。

この大人の機能をふまえて子どもの発話末にあらわれた「な」の機能を考

11) (28) の「……………」と示された発話は、観察者がスマハレの発話を聞きとれなかったことを示している。

えると、(28)の発話の発話末にあらわれた「な」は、(5a)に示したように、終助詞「な」の確認作法の機能を果たしていると思われる。

発話末に単独であらわれる「な」は、(29)のようにもあらわれる。

(29) ……………な。(→父) (1;5.25)

(29)の発話が観察された状況について、野地(1973-1977:165)は「窓際などによって、外を見ているとき、ふっとふりかえって、話しかけるようにする。おしまい、「ナ」がはっきりきかれる。」と記述し、ここで、野地(1973-1977:165)はスミハレの発話に「対話意識の発生がみられる」という談話文法の知識が観察され始めたという分析を加えている。(29)は聞き手である父に向かって発せられたものである。(29)のように対話で使用された発話末の「な」もまた、(観察者の聞きとれなかった)「……………」の命題内容を、話し手が聞き手に確認する機能を果たしているようである。すなわち、(29)でもまた「な」は対話用法で用いられているようである。

しかし、子どもの文法において、発話末に単独であらわれるのは「な」だけではない。(30)に示すように終助詞「ね」もまた、単独であらわれる。

(30)は、終助詞「ね」が初めて産出されたときの例である。

(30) ……………ね。(→父) (1;5.25)

野地(1973-1977:166)は、(30)が発話されたときの状況について、「大掃除の午後、氷をみんなで食べている時、スミハレは夢中になって食べていたが、やがて一さじ口に入れ、それを食べ終わって、大きく口を開けて見せ、次に父の方を見ながら、このように言う。」と記している。話者であるスミハレは聞き手である父に向けて(観察者の聞きとれなかった)「……………」の内容(「口の中に何もなくなった」)を確認している。すなわち、

(30)の発話末にあらわれた「ね」は話し手が聞き手に自分の発話した命題内容を確認する機能を示していると思われる。

大人の文法における終助詞「ね」は(4)に示すように、話し手が聞き手に命題内容を確認する機能を示す。(例文再録)

(4) A: あなたが田中さんですね。
B: はい、そうです。 (宮崎 2002)

(30)の発話末にあらわれた「ね」は、(4)に示したように、話し手が聞き手に命題内容を確認する機能をもつと判断される¹²⁾。

発話末にあらわれる「ね」の例として、野地(1973-1977)はさらに(31)の例も挙げている。

(31) ……………ネ。(→父) (1;6.14)

野地(1973-1977:181)は、(31)が発話された文脈について「文末の「ネ」をはっきりと言う。それに、優しい、愛嬌のある身振りがある。」と記録している。(31)の発話は、(観察者の聞きとれなかった)命題内容を話者であるスミハレが父に確認しているものである。つまり、(31)の発話末にあらわれた「ね」は(30)と同様に、確認をあらわす機能をもつといえよう。

したがって、野地氏が観察するように、「な」と「ね」が「…な」や「…ね」のように、発話末にあらわれた場合、それは大人の文法における終助詞「な」や「ね」の機能を示すようである。

12) 野地氏は、(30)の発話に関して、「今までは、「ナ」であったが、「ネ」になっている。」というように、終助詞が「な」が発話され始め、その後「ね」が発話されたという趣旨の記述をしている。

3.3.2. 対話での終助詞「な」と独話での終助詞「な」の語用論的機能

スミハレは1歳8ヶ月から、(32)と(33)に示すように、対話で使用される「な」と(34)と(35)に示すように独話で使用される「な」を発話している。

まず初めに、(32)の例を見てみよう。

(32) トン タ な。(→母) (1;5.25)

野地(1973-1977:167)によると、(32)の発話されたときの状況について、「乳母車に乗っていて、ひどく揺れて、体がドスンと揺れると、このように言う。」と記録している。これによれば、(32)は、話者であるスミハレが、「ドスンとなった」という命題内容を、母に確認している発話と考えることができる。すなわち、(32)の発話末にあらわれている「な」は、命題内容を聞き手に確認する機能を果たしている。

大人の文法における終助詞「な」は(5a)で示したように、確認の意味をもつ。(例文再録)

(5) a. よく頑張ったな

したがって、(32)に示した発話は、(5a)で示した対話で用いられる終助詞「な」の機能のように、確認をあらわす機能を示すものであると思われる。

対話で使用される「な」の発話は少なくない。(33)に示す例もそれである。

(33) ブーナ。(→母) (1;6.1)

(33)の発話の文脈として野地(1973-1977:175)は、「母におんぶしても

らい、買い物に行く途中、バタバタ(自動三輪車)がくると、このように母に言う。」と記している。野地氏は「「ブー」(三輪車)がきたなあ意。」というように(33)の発話の意味をとらえている¹³⁾。野地氏の観察によると、(33)の発話は、「自動三輪車が来た」ということを確認していると分析される。すなわち、(33)の発話末にあらわれている「な」は、話者であるスミハレが命題内容を聞き手である母に確認する機能をもつようである。

更に、終助詞「な」は、(34)や(35)に示すように、独話でも使用される。(34)は独話で使用される「な」の初出例である。(34)は、「見えない」をあらわす「みえん」に「な」が付加している。

(34) 1. ミエン ナー。(→己)
2. ミエン ネ。(→父) (1;8.6)

(34)の文脈について野地(1973-1977:252)は、「飛行機の音を聞いて、窓を開け、空を振り仰ぐが、飛行機が見えない。そこで、1の発話のように言い、まぶしそうな顔をして、このように言う。ついで、父が抱っこして庭に出て、見せてやると、2のように父に言う。」と記録している。野地氏の観察に基づくと、(34)の1の発話は、スミハレが「(飛行機が)見えない」という命題内容を自分自身に独言している例とされている。

終助詞「な」は、実際大人の発話においても(6)に示したように用いられる。(例文再録)

(6) 今日は外が寒そうだな

更に、(35)の発話も独話で使用される「な」の例として挙げられるだろ

13) 野地氏は(33)の発話について「「ミエン」は、はっきり言った。「チュン」は雀のことである。」というように、(33)が発話された状況について具体的な記述をしている。

う。

(35) チュン ミエン ナー。(→己) (1;9.31)

野地 (1973-1977:308) は、(35) の発話状況について「夕方、家の北東の大きな楠の上に、雀がいないのを見て、このように言う。」と記している。野地氏の解説に基づくと、(35) の発話は、(6) に示したように話者であるスミハレが自分自身に独言したものと判断される。

このように、子どもの文法における終助詞「な」には、主に二つの特徴があると分析できる。第一に、幼児が同じ音であらわされる対話で使用され確認の機能を示す「な」と独話で使用され独話であることを示す「な」を1歳8ヶ月の段階で使い分けている。第二に、対話用法の「な」と独話用法の「な」は大人の文法における終助詞「な」の機能をあらわしている。

3.3.3. 幼児の発話する終助詞「よ」の語用論的機能

では、幼児は終助詞「よ」の機能はいつどのように獲得するのだろうか。前小節と同様にスミハレのコーパスを分析対象として、「よ」が大人の文法におけるそれと同様の機能を示すのかどうかについて考察する。

スミハレは1歳9ヶ月7日から終助詞「よ」を発話し始めている¹⁴⁾。(36)は、「危ない」を意味する「あむない」に「よ」が付加された終助詞「よ」の初出例である。

(36) アムナイヨ。(→父) (1;9.7)

スミハレが(36)を発話したときの文脈について、野地(1973-1977:285)は、

14) 終助詞「よ」は、「な」や「ね」とは異なり、「……よ」のように単独であられることはなかった。

「国語二年生という雑誌の中に書かれた話の内容で、子猿が木から落ちて、猟師の駆けつけているところを見て、このように父に言う。」と記録している。野地氏の記録に基づくと、(36) の発話は、スミハレが、猟師から狙われている猿に危険な状態であることを知らせるために、「あむないよ」と発話していると解釈される。

先に述べたように、大人の文法における終助詞「よ」には、(7a) に示したように聞き手が知らない情報を聞き手に告知する教示用法があるようである。(例文再録)

(7) a. 危ないよ

大人の機能に基づいて分析すると、(36) の発話末の「よ」もまた、大人のそれと同じように教示用法で用いられているといえることができるだろう。

子どもの文法において幼児が発話する終助詞「よ」が示すのは教示用法だけでなく、注意用法もあるようである。(37) の例がそれである。

(37) カーチャン ブーブー オチタ ヨ。(→母) (1;10.23)

(37) の発話を話者であるスミハレが母に呼びかけたときの文脈として、野地(1973-1977:326)は、「窓から自動車を落として、このように言う。」と記している。野地氏の観察によれば、(37) の発話は、話者であるスミハレが「自動車が落ちた」ことを母に伝え、母の注意を喚起しようとしている。

大人の文法における終助詞「よ」の注意用法は、(7b) に見るように話し手が既知の情報が聞き手にとって未知なものである場合に、話し手が聞き手の注意を喚起して情報を伝達する用法である。(例文再録)

(7) b. 今日は休みだよ

更に、「よ」が注意用法の機能をあらわす例は(37)だけではなく、野地氏は(38)の発話例も挙げている。

(38) ターチャン オッキ シタ ヨ。(→母) (1;11.6)

野地(1973-1977:340)は、話者であるスミハレが(38)を発話した状況を、「起床した(オッキシタ)と、台所の母(ターチャン)にこのように言う。」と記述している。これによれば、(38)の発話は、話者であるスミハレが、「赤ちゃんが起床した」ことに気づいていない母に「赤ちゃんが起きた」ことを伝えている。すなわち、(37)と(38)の発話末にあらわれた「よ」は、(7b)で示した終助詞「よ」の注意用法の機能を果たしていると思われる。

本小節では幼児スミハレの発話する終助詞「よ」の機能について、大人の機能と比較しつつ獲得過程について考察した。結果としては、幼児は、1歳9ヶ月から終助詞「よ」を発話し始め、スミハレの終助詞「よ」が、使用される当初から教示用法と注意用法で用いられているという点において、大人と質的に同じものであるといえるようである。

3.3.4. 子どもに特有な終助詞「な」の語用論的機能

1歳児の幼児が多く終助詞を大人と同様の意味で用いていることは興味深い。では、子どもはすべて最初から大人と同じ機能で終助詞を使うのだろうか。

興味深いことに、Murasugi and Fuji (2008)が指摘するように、野地(1973-1977)の観察記録には、幼児が大人とは異なる用法で「な」を発話の最後に付加する例がみとめられる。例えば、Murasugi and Fuji (2008)は、

スミハレが「要求」や「意思」をあらわす意味機能で「な」を用いると報告している。

その例を見てみよう。(39)は、「な(一)」を名詞的要素(パン)に付加することで「要求」や「意思」をあらわしている。

(39) パン ナー。(→母) (1;5.26)

野地(1973-1977:167)は(39)が発話されたときの状況を、「午前6時、目を覚まし、パンを欲しがって、このように言う。」と記述している。野地氏の観察によると、(39)の発話は、話者であるスミハレが「パンが欲しい」ことを母に訴えかけている例である。つまり、発話末の「な」が「要求」の意味を示している。

更に、(40)は、「な(一)」のみで聞き手に「要求」を示すことを示した発話例である。

(40) ナー。(→父) (1;7.17)

(40)の発話の文脈について、野地(1973-1977:229)は「父が耳かきを使っているのを見ると、それが欲しくなり、父に向かって、手を出して、甘えるように、このように言う。」と記述している。野地氏の観察に基づくと、(40)の発話は、「なー」のみで「耳かきが欲しい」という「要求」の意味機能を示している。(40)では命題内容が発話されておらず、かつ発話全体が「要求」をあらわしていると野地氏によって観察されていることから、「な」が「要求」の機能を示すことが、より鮮明となる。

Murasugi and Fuji (2008)は、スミハレが、1歳8ヶ月頃から、「要求」や「意思」をあらわすために「ちょうだい」を付加する段階があると指摘している。(41)では、「(物を)与えてくれ」という命令の意味を示す「ちょう

だい」と終助詞「な」が同じ発話内に観察されている。

(41) ラジオ チョーダイ ナ ナ ナ。(→母) (1;8.13)

(41) の発話をスミハレが母に向けて産出した時の状況として、野地 (1973-1977:257) は、「ラジオ (NHK) のスイッチを入れてくれと、このように母に言う。」と記している。野地の解説によると、(41) の発話は「ラジオのスイッチを入れて欲しい」という「要求」の意味をあらわしている。Murasugi and Fuji (2008) の分析に基づくと (41) の発話は「ちょうだい」と「な な な」の両方が「要求」の機能をあらわしていると分析される。

(41) のように、「ちょうだい」と「な」が同じ発話内にあらわれる例は少なくない。(42) の例も同様の例である。

(42) カキ チョーダイ ナ。(→母) (1;8.13)

(42) の発話の文脈について、野地 (1973-1977:257) は「お昼前に、お腹がすいたらしく、母に向かって、このように言う。」と記述している¹⁵⁾。野地 (1973-1977:257) の観察に基づくと、(42) の発話が示しているのは、「柿を食べさせてほしい」という「要求」である。これは(41)と同様に、「ちょうだい」と「な (-)」の両方が「要求」の機能をあらわしている。

1歳8ヶ月頃には、(43) に示すように動詞「とる」の命令形「とって」がわずかながらあらわれるようになるが、活用がまだ十分に獲得されていない段階では、終助詞「な」が依然として「要求」をあらわす助詞として発話されるようである。

15) 野地氏は「カキ」は柿のことを指していると記述している。

(43) オチタ。 トッテ ナ。(→母) (1;8.15)

(43) の発話が観察された状況について野地 (1973-1977:261) は、「窓から、電車 (玩具) を落として、母に向かって、このように言う。」と記録している。この観察によれば、(43) の発話は、「玩具を取って欲しい」「玩具を取ってくれ」と話者であるスミハレが母に「要求」している。すなわち、(43) の発話末にあらわれた「な (-)」が「要求」の意味をあらわしている。

更に、「な」は大人の文法には存在しない機能として、「要求」の意味機能だけではなく、「意思」の意味機能をあらわす場合もある。(44) から (46) の発話は、子どもの文法において、終助詞「な」が「意思」の意味をあらわしていると思われる発話例である。(44) の例を見てみよう。(44) の発話は「しっこ」という名詞に「な (-)」が付加することで「意思」をあらわしている。

(44) シッコ ナ。(→母) (1;7.14)

(44) の発話が記録された文脈について野地 (1973-1977:226) は、「しっこをする前に、母のところに来て、このように母に言う。」と書き記している。野地氏の観察に基づくと、(44) の発話では、「しっこをする」という話者の「意思」が示されている。すなわち、発話末の「な (-)」が「意思」の意味機能をあらわしている。

(45) の発話の「な」についても、話者であるスミハレが「意思」の意味として発話していると思われる。

(45) アッチ イタ ナ ナ。(→母) (1;7.15)

野地 (1973-1977:227) は (45) の発話があらわれたときの状況について、

「向こうへ行くという時、このように言う。」と記録している。

野地氏の観察に基づくと、(45)の発話は話者であるスミハレの「向こうへ行く」という「意思」をあらわしている。この場合、(45)の発話は(44)の例と同様に、発話末の「な な」が「意思」の意味機能を示している。

さらに、(46)の発話も(44)や(45)の発話例と同様に、発話末の「な」が「意思」を示しているようである。

(46) チー シタ ナー。(→母) (1;7.15)

(46)の発話の文脈として野地(1973-1977:227)は、「しっこ(チー)をするというとき、このように母に言う。」と記述している。これによると、(46)の発話では、「しっこをする」という話し手の「意思」があらわされている。つまり、(46)の発話末の「な(一)」が「意思」の意味機能をもつと思われる。

このように、子どもは終助詞「な」を音声的に具現化することによって「要求」や「意思」をあらわすことがあるようである。

3.3.5. 初出時期から観察される終助詞「よね」の語用論的機能

では、幼児が発話する「よね」の機能は大人の文法のその機能を示すのだろうか。本小節では、(47)から(49)に示すように、スミハレが発話した「よね」は、大人の文法における「よね」が示す機能を果たしていることを示す。スミハレは、終助詞「よ」と同様に、1歳9ヶ月から終助詞「よね」を発話し始めている。

(47)の発話は、終助詞「よね」の初出例である。(47)は母の発話を模倣し、それに「ね」を付加している。

(47) 1. アツイヨ。(母→)
2. アツイヨ, ネ。(→母) (1;9.12)

(47)の発話が観察された状況について野地(1973-1977:290)は、「お豆腐の味噌汁を入れてやり、母が1のように言うと、すぐにまねて、2のように言う。」と記述している。野地氏の解説に基づくと、(47)の発話は、母がスミハレの注意を喚起するために述べた「熱いよ」という発話を話者であるスミハレが模倣し、それに終助詞「ね」を付加して、「味噌汁が熱い」という命題内容を確認している。

大人の終助詞「よね」は、(10)に示したように、話し手の認識が聞き手の認識でもあるかを確認することで話し手の認識を確実にしようとする機能を示す。(例文再録)

(10) A: 明日の天気予報って雨だったよね?
B: そうだよ。

このように、(47)の発話末の「よね」は、話者であるスミハレがもつ「味噌汁が熱い」という認識が聞き手(母)の認識でもあるかを確認することで話し手の認識を確実にしようとする機能を果たしている。

「よね」の発話は(47)だけではない。(48)の発話も発話末に「よね」があらわれた具体例である。

(48) ハイラン ヨ ネ。(→父) (1;9.13)

野地(1973-1977:292)は、話者であるスミハレが(48)の発話を父に向かって発話する状況について、「朝、父に足袋をはかせてもらっている時、うまく入らないと、このように言う。」と記録している。野地の観察に基づくと、(48)は話者であるスミハレが「足袋が入らない」ことを父に伝え、その情報を父と共有しようとしている発話であると分析される。

大人の文法において、終助詞「よね」には、(8)に示したように、話し手

の認識の受け入れを求め、聞き手と認識を共有しようとする機能もある。(例文再録)

- (8) A: 眠くなんないの? 夜になって。
B: いや、仕事中に眠くなるんですよね。(伊豆原 2003:7)

このように、(48)の発話末の「よね」は、(8)で示された大人の機能と同質のものであると思われる。

更に、「よね」の発話例として、(49)を挙げてみよう。

- (49) 1. トーチャン オタベ。(→父)
2. オイモ オイチ ヨ ネ。(→父) (1;10.27)

(49)が発話された状況について野地(1973-1977:328)は、「朝、床の中で、お芋を食べながら、父に向かって、このように言う。」と記している¹⁶⁾。野地の観察に基づけば、(49)の発話は、話者であるスミハレが「お芋がおいしい」という認識が父(聞き手)の認識でもあるかを確認している。大人の文法において、終助詞「よね」には、(9)に示したように、話し手の認識が聞き手の認識でもあるかを聞き手に確認することで、聞き手を話し手の認識領域に取り込む機能がある。(例文再録)

- (9) A: 真夜中に一人で外を歩くのは危ないよね?
B: そうだね。

したがって、(49)の発話末の「よね」は、大人の文法において、(9)に示

16)「オイチ」は「おいしい」の意であると野地氏は記述している。

した機能を果たしていると考えられる。

このように、子どもの文法における終助詞「よね」は1歳9ヶ月から発話され始め、幼児が発話する「よね」は大人の文法のものと同質的のものであるようである。

3.3.6. 質的研究の分析結果

質的研究の分析の結果によると、終助詞「な」と「ね」を1歳5ヶ月頃から発話し始め、終助詞「よ」と「よね」を1歳9ヶ月頃から発話し始めた。さらに、多くの終助詞が存在する中で、終助詞「な」ならびに「ね」を最も早く発話した。

大人の文法の終助詞の機能と子どもの文法の終助詞の機能ならびに終助詞の初出年齢を一覧にしたものを表2に示す。

表2 大人の文法と子どもの文法における終助詞の共通点と相違点

終助詞(機能)	大人の文法	子どもの文法	初出年齢
ね(対話)	(4)	(30), (31)	1;5.25
な(対話)	(5a)	(28), (29), (32), (33)	1;5.23
な(独話)	(6)	(34), (35)	1;8.6
な(要求)	—	(39), (40), (41), (42), (43)	1;5.26
な(意思)	—	(44), (45), (46)	1;7.14
よ(教示用法)	(7a)	(36)	1;9.7
よ(注意用法)	(7b)	(37), (38)	1;10.23
よね(第一)	(8)	(48)	1;9.13
よね(第二)	(9)	(49)	1;10.27
よね(第三)	(10)	(47)	1;9.12

表2では、大人の文法において(4)から(10)に示したそれぞれの終助詞の語用論的意味が、子どもの文法においても(28)から(38)と(47)から(49)で示した発話の末尾にあらわれたことが示されている。また、(39)

から(46)に例示したように、幼児が発話する「な」には「要求」や「意思」をあらわす機能がある。

このように、幼児は大人の文法におけるそれぞれの終助詞の機能を1歳5ヶ月から1歳10ヶ月の間に発話し始め、大人の文法にはない機能として「要求」や「意思」をあらわす発話をするようである。幼児言語獲得の初期にあらわれる「な」は、終助詞一般のあらわすべき意味の多くを具現化する音形となっている¹⁷⁾。幼児は談話的意味をかなり早い段階からあらわす。それぞれの意味を具体的にあらわす語彙や音形は、大人と同じものとは限らない場合もある。特に初期の「な」は、多くの談話的意味をあらわすようである。

3.3.7. 質的研究の結論

大人の文法において、話し手が聞き手との関係を構築する語用論的機能を持つ終助詞「な」や「ね」、「よ」ならびに「よね」を、日本語を母語とする幼児スマハラは、終助詞「な」と「ね」を1歳5ヶ月から発話し、終助詞「よ」と「よね」を1歳9ヶ月から発話した。これは、対話で使用される「な」の語用論的機能—話し手が聞き手に命題内容を確認すること—をスマハラが1歳5ヶ月頃から知っていることを示唆する。

3.4. 仮説

以上の質的研究の結果は、終助詞「な」と「ね」が、終助詞「よ」よりも先に獲得されることを強く示唆するものである。したがって、質的研究の結

17) 野地氏は子どもの終助詞「な」は(vii)に示すように、大人の終助詞「よ」の機能をあらわした例があると報告している。

(vii) オチタ ナ(→母) (1;7.15)

(vii)の発話の文脈について野地(1973-1977:227)は、「「落ちたよ」と言う場合、このように言う。」と記録している。野地氏の解説に基づく、(vii)の例のように、幼児は大人の終助詞「よ」が示す意味を「な」で発現することがあるようである。

果に基づき、以下に示す仮説を立て、統計的に検証する。

(50) 終助詞「な」と「ね」は、終助詞「よ」よりも先に獲得される。

終助詞「な」と「ね」が終助詞「よ」よりも先に獲得されるという質的研究において観察された特徴が、実際に統計的にも裏付けられるかどうかを調査する。

3.5. 終助詞に関する量的研究：統計分析

本小節では、二項検定による量的統計分析により、(50)の仮説が支持されるかどうかを検証する¹⁸⁾。以下では、ここまでの議論に基づき、統計的研究を行なった内容を報告する。

3.5.1. 終助詞の量的統計研究(木戸2011)

終助詞「な」と「ね」は、終助詞「よ」よりも先に獲得されるという仮説は、実際、統計的にも証明できるのであろうか。(50)の仮説が支持されるかどうかを、木戸(2011)は、二項検定を用いて検証している。木戸(2011)においては、終助詞「な」や「ね」、「よ」ならびに「よね」の発話される相

18) 二項検定とは、ある二つのデータ(例えば、構文Aと構文B)の比率に有意な差があるかどうかを調べる統計分析である。二項検定の公式は(viii)のようにあらわすことができる。

(viii) $p = (X / (X + Y))^2$

p は統計による計算の結果得られる値を示しており、それは有意確率、または、 p 値と呼ばれる。 X は構文Bが初出として観察されてから使用された構文Aの使用回数をあらわし、 Y は構文Bの使用回数をあらわしている。 Z は構文Bが観察される前に使用された構文Aの使用回数を示している。つまり、言語獲得研究の場合、 $X / (X + Y)$ はXが一度発話される相対的頻度の確率をあらわしている。したがって、(viii)の式を用いることで構文Bが観察される前に観察された構文Aが偶然、観察されたものなのかどうかを統計による計算で、決定することができる。本稿では、有意水準は.05とする。

対的頻度と有意確率が表3のように示されている¹⁹⁾。

表3 終助詞「な」、「ね」、「よ」ならびに「よね」の相対的頻度と有意確率

幼児	相対的頻度				p=
	な	ね	よ	よね	
スマハレ	<u>0.93</u>	0.07	—	—	6^0.93 > .05
	<u>0.12</u>	—	0.88	—	95^0.12 < .001
	—	<u>0.31</u>	0.69	—	49^0.31 < .001
	—	—	<u>0.68</u>	0.32	2^0.68 > .05

表3では、終助詞「な」と「ね」、「よ」ならびに「よね」の中から二つの終助詞を抽出し、その二つの終助詞の間で求められたそれぞれの終助詞の相対的頻度とそれら終助詞が同時に獲得されたものなのかどうかを示した有意確率が示されている。

まず初めに、終助詞「な」と「ね」ならびに終助詞「よ」と「よね」の獲得時期に有意差があるかどうかを検証しよう。終助詞「な」と「ね」ならびに終助詞「よ」と「よね」のp値は.05よりも大きな値である。つまり、終助詞「な」と「ね」の獲得には有意差がないといえる。

一方、終助詞「な」と「よ」及び終助詞「ね」と「よ」の獲得時期に有意差があるかどうかを見てみよう。終助詞「な」と「よ」及び終助詞「ね」と「よ」のp値は.001よりも小さな値である。

以上に示すように、木戸(2011)は、終助詞「な」と「よ」及び、終助詞「ね」と「よ」の獲得の時期には有意差があると分析している。

19) CHILDES コーパスから終助詞「な」や「ね」、「よ」及び「よね」の発話を抽出する際、留意したのは以下の五点である。第一に、模倣したものは発話数に入れない。第二に、同じ発話を連続したものは、合わせて一回の発話とする。第三に、発話の初めか発話末か分からない単独のものは発話数に数えない。第四に、埋め込み節内にあらわれた終助詞は発話数に数えない。つまり、主節にあらわれた終助詞に限定する。第五に、「ね」は「ねえ」の発話を含み、「な」は「なあ」、「よ」は「よお」を含む。

3.5.2. 終助詞の量的統計分析の結果と分析

量的統計分析によると、終助詞「な」と「ね」あるいは「よ」と「よね」の獲得には有意差がなく、終助詞「な」または「ね」と「よ」の獲得には有意差があるという結果が得られた。この結果は、終助詞「な」と「ね」は終助詞「よ」や終助詞「よね」よりも先に獲得されたことを示している。したがって、(50)に示された仮説は支持される。

4. 結論

本稿では、CHILDES コーパスを使用して、スマハレの1歳5ヶ月から3歳0ヶ月までの発話を対象として、終助詞「な」や「ね」、「よ」ならびに「よね」の発話された状況について発話資料(野地, 1973-1977)を確認することにより、終助詞「な」や「ね」、「よ」ならびに「よね」のあらわれ方と意味機能と特性に関して質的分析を行なった。さらに、同コーパス(CHILDES)を使用して、二項検定により量的統計分析を行なうことで、質的研究の結果から得られた仮説が支持されるかどうかを検証した。

幼児は、1歳5ヶ月という早い時期から終助詞の一部を獲得している。スマハレは、終助詞「な」と「ね」は1歳5ヶ月頃から発話し始め、終助詞「よ」と「よね」は1歳9ヶ月頃から発話し始めた。終助詞「な」と「ね」は、終助詞「よ」と「よね」よりも時期的に早く産出されており、また、それらは大人と(「な」を一部例外として)質的に大きく齟齬はない意味で用いられていた。さらに、大人の文法の「な」にはない機能として、Murasugi and Fuji (2008)が指摘するように、スマハレの発話した「な」は「要求」と「意思」の意味をあらわすことがあった。

さらに、本稿では終助詞「な」と「ね」、「よ」ならびに「よね」の獲得時期に差があるかを統計的に検証するために、二項検定を行なった。その結果は、終助詞「な」と「ね」は、終助詞「よ」と「よね」よりも先に獲得され

ているというものであった。

本研究は、幼児は CP 領域よりもさらに上部の談話に関する機能範疇を早く獲得するという村杉 (2012) と Murasugi (2011 ; 2012a, b) の仮説を支持する。村杉 (2012) と Murasugi (2011 ; 2012a, b) は、幼児は、TP を切り取っている段階 (擬似主節不定詞の段階) と同時期に、Speech Act Phrase の主要部を産出している事実を挙げ、Speech Act Phrase といった上層の獲得が下層の時制の獲得を促す要因となるとして Pragmatic (and Speech Act)-Bootstrapping という言語獲得に関する仮説を提唱している。本稿は、その仮説を強く支持するものである。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、南山大学研究センターならびに国立国語研究所共同研究プロジェクト (「言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約: 日本語獲得に基づく理論的研究」) のメンバーである齋藤衛氏、岸本秀樹氏、高橋大厚氏、杉崎鉦司氏、中谷友美氏から貴重な示唆を得た。

本稿は、国立国語研究所共同プロジェクト (「言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約: 日本語獲得に基づく理論的研究」代表: 村杉)、2011 年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A ならびに科学研究費補助金基盤研究 (C) (23520529) (「主節不定詞のパラメーター: 比較統語理論と言語獲得を繋ぐ試み」(日本学術振興会) (村杉)) により援助を受けている。ここに記して、深く感謝する。

参考文献

Cinque, Guglielmo. (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistics Perspective*. Oxford: Oxford University Press.

- Endo, Yoshio. (2007) *Locality and Information Structure - A Cartographic Approach to Japanese*. Amsterdam: Benjamins.
- Haraguchi, Tomoko. (2012) "Distributions of Modals and Sentence Final Particles in Japanese: Selection or Something Else?" Paper presented at 13th Workshop of the International Research Project on Comparative Syntax and Language Acquisition. Center for Linguistics, Nanzan University, February 20th.
- MacWhinney, Brian. (2000) *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Murasugi, Keiko. (2011) "Peripheral Particles in Early Child Japanese." Paper presented at 12th Workshop of the International Research Project on Comparative Syntax and Language Acquisition. Center for Linguistics, Nanzan University, October 1st.
- Murasugi, Keiko. (2012a) "Tense and Peripheral Particles in Child Japanese." Paper presented at 13th Workshop of the International Research Project on Comparative Syntax and Language Acquisition. Center for Linguistics, Nanzan University, February 20th.
- Murasugi, Keiko. (2012b) "On the Acquisition of the Right Periphery: Evidence for the Truncation Hypothesis." Paper presented at Linguistics Consortium Workshop, 清華大学, 台湾, March 15th.
- Murasugi, Keiko, and Fujii, Chisato. (2008) "Root Infinitives: The Parallel Routes the Japanese- and Korean-Speaking Children Step in." Paper presented at Japanese/Korean Linguistic Conference 18, City University of New York, November 13th.
- Okada, Keiko, and Grinstead, John. (2003) "The Emergence of CP in Child Japanese." *Proceedings of the 6th Generative Approaches to Second Language Acquisition Conference (GASLA 2002)*, ed. Juana M. Liceras et al., 213-218. Somerville, Massachusetts: Cascadilla.
- Rizzi, Luigi. (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery." in Liliane Haegeman (ed.), *Elements of Grammar*, Dordrecht: Kluwer, Academic Publishers, 281-337.
- Saito, Mamoru. (2009) "Sentence Types and the Japanese Right Periphery." Paper presented at The International Conference on Sentence Types: Ten Years After, University of Frankfurt, June 26-28.
- 井上和子. (2009) 『生成文法と日本語研究「文文法」と「談話」の接点』. 大修館書店. 東京.
- 伊豆原英子. (2003) 「終助詞「よ」「よね」「ね」再考」. 『愛知学院大学教養部紀要』. 51 巻 2 号. 1-15.

- 遠藤喜雄. (2008) 「普遍的な統語構造地図における日本語の終助詞」. 科研費研究報告書『文の語用論的機能と統語論:日本語の主文現象からの提言(1)』(研究代表者:長谷川信子). 37-62. 神田外語大学.
- 遠藤喜雄. (2010) 「終助詞のカートグラフィー」. 『統語論の新展開と日本語研究』. 67-94. 開拓社. 東京.
- 大久保愛. (1967) 『幼児言語の発達』. 東京堂出版. 東京.
- 小野晋・中川裕志. (1997) 「階層的記憶モデルによる終助詞「よ」と「ね」「な」「ぞ」「ぜ」の意味論」. 『認知科学』. 2巻. 認知科学会.
- 加藤重広. (2001) 「文末助詞「ね」「よ」の談話構成機能」. 『富山大学人文学部紀要』. 35巻. 31-48.
- 木戸康人. (2011) 「言語獲得研究における量的統計分析の有意義性」. ms. 南山大学.
- 金水敏. (1993) 「終助詞ヨ, ネの意味論的分析」. 『パネルディスカッション 日本語談話における情報論的アプローチ』. 日本認知学会・学習と対話研究会. 93巻1号. 13-20.
- 齋藤衛. (2012) 「幼児日本語にみられる属格主語と Finite Head の性質」. 国立国語研究所共同研究プロジェクト『言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約:日本語獲得に基づく実証的研究』. 第3回研究会. 南山大学. 3月7日.
- 野地潤家. (1973-1977) 『幼児の言語生活の実態 I-IV』. 文化評論出版. 東京.
- 宮崎和人. (2002) 「終助辞「ネ」と「ナ」」. 『阪大日本語研究』. 14巻. 1-18.
- 村杉恵子. (2012) 「主節不定詞と談話不変化詞から探る幼児の文法構造」. 国立国語研究所共同研究プロジェクト『言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約:日本語獲得に基づく実証的研究』. 第3回研究会. 南山大学. 3月7日.